

フタオビコヤガに対する有効薬剤

高橋良知・菊池英樹

1. ねらい

近年、秋田県ではフタオビコヤガの発生量が増加傾向にある。本種は年に数回発生し、防除時期は第1世代が5月下旬～6月上旬、第2世代が7月上旬、第3世代が8月上旬となる。特に、第3世代防除時期にはこれまで広く使用されていた箱施用剤の効果が切れ、緊急防除を実施している農家が多いのが現状である。

また、緊急防除に使用されている茎葉散布剤の中には効果が低いという事例も報告されている。

そこで、近年開発された育苗箱施用剤のと茎葉散布剤の防除効果について検討を行う。

2. 試験方法

(1) 箱施用剤試験の試験概要については表1に示した。

(2) 茎葉散布剤試験

- ① 試験年次：2011年
- ② 調査場所：大仙市太田町
- ③ 耕種概要：播種5月1日、移植5月28日
- ④ 供試薬剤：エトフェンプロックス粉剤 DL (3kg/10a)、PAP 粉剤3DL (3kg/10a)、カルタップ粉剤 DL (3kg/10a)、テブフェノジド粉剤 DL (3kg/10a)、MEP 乳剤 (2000倍 100 $\frac{1}{10}$ /10a)、シラフルオフエン乳剤 (2000倍 100 $\frac{1}{10}$ /10a) に加えて無処理区を設置した。
- ⑤ 区制：1区50m² 2連制
- ⑥ 調査方法：薬剤散布直前(8月5日)と薬剤散布3日後(8月8日)にすくいとり調査(5回振り)を行った。

3. 結果及び考察

(1) 箱施用剤では、クロラントラニリプロ

ール(0.75%)・プロベナゾール(20%)粒剤「50g/箱」の床土混和处理と播種時覆土前処理は、8月上旬まで本種の発生が認められなかった。また、クロラントラニリプロール(0.75%)・プロベナゾール(24%)粒剤「50g/箱」緑化期処理は、7月8日に2頭(20回振り)認められたが、8月4日には発生が認められなかった。イミダクロプリド(2%)・スピノサド(1%)・イソチアニル(2%)粒剤「50g/箱」緑化期処理は、7月8日に7.7頭(20回振り)、8月4日に41.0頭(20回振り)認められたが、参考薬剤のフィプロニル(0.6%)・オリサストロビン(2%)・プロベナゾール(20%)粒剤に比較すると発生が抑制された(表2、3、4)。

(2) 圃場において本種の発生が多い際に用いる茎葉散布剤では、エトフェンプロックス粉剤 DL、カルタップ粉剤 DL、テブフェノジド粉剤 DL、シラフルオフエン乳剤は薬剤散布後に本種の発生が抑制された。一方、PAP 粉剤3DL、MEP 乳剤は薬剤散布後でも本種の発生が増加した(図1)。

4. まとめ

クロラントラニリプロール(0.75%)・プロベナゾール(20%)粒剤「50g/箱」の床土混和处理と播種時覆土前処理、クロラントラニリプロール(0.75%)・プロベナゾール(24%)粒剤およびイミダクロプリド(2%)・スピノサド(1%)・イソチアニル(2%)粒剤「50g/箱」緑化期処理は本種に対する効果が高かった。

エトフェンプロックス粉剤 DL、カルタップ粉剤 DL、テブフェノジド粉剤 DL、シラフルオフエン乳剤の防除効果が高かったが、PAP 粉剤3DL、MEP 乳剤の防除効果が低かった。

表1 箱施用剤効果試験の概要

試験年次	試験場所	供試薬剤	処理方法 処理量	耕種概要	調査方法
2011年	美郷町土崎	試験薬剤 クロラントラニプロール(0.75%)・ プロベナゾール(20%)粒剤	播種時覆土前 50g/箱	播種:4/28 移植5/26	a)
		参考薬剤 クロチアニジン(0.8%)・ イソチアニル(2%)粒剤			
2011年	大仙市太田町	試験薬剤 クロラントラニプロール(0.75%)・ プロベナゾール(24%)粒剤	緑化期 50g/箱	播種:5/1 移植:5/28	b)
		参考薬剤 イミダクロプリド(2%)・スピノサド(1%)・ イソチアニル(2%)粒剤 フィプロニル(0.6%)・オリサスロトビン (2%) プロベナゾール(20%)粒剤			
2012年	羽後町軽井沢	試験薬剤 クロラントラニプロール(0.75%)・ プロベナゾール(20%)粒剤	床土混和 50g/箱	床土混和:4/16 播種:4/23 移植5/28	c)
	参考薬剤 フィプロニル(0.6%)・ プロベナゾール(20%)粒剤				

a)2圃場において8月4日にすくいとり調査(10回振り)を行った。

b)各薬剤処理約20a圃場において、7月8日と8月4日に3ヵ所ですくいとり調査(20回振り)を行った。

c) クロラントラニプロール(0.75%)・プロベナゾール(20%)粒剤は1圃場、フィプロニル(0.6%)・プロベナゾール(20%)粒剤は2圃場において、7月5、11、26日、8月9日にすくいとり調査(20回振り)を行った。

表2 現地圃場試験結果 (2012年 羽後町軽井沢)

供試薬剤	処理時期 処理量	平均すくいとり虫数(20回振り)			
		7月5日	7月11日	7月26日	8月9日
クロラントラニプロール(0.75%)・ プロベナゾール(20%)粒剤		0	0	0	0
フィプロニル(0.6%)・ プロベナゾール(20%)粒剤A圃場	床土混和 50g/箱	2	40	241	55
フィプロニル(0.6%)・ プロベナゾール(20%)粒剤B圃場		3	74	200	82

表3 現地圃場試験結果 (2011年 美郷町土崎)

供試薬剤	処理時期 処理量	調査圃場	平均すくいとり
			幼虫数(10回振り)
クロラントラニプロール(0.75%)・ プロベナゾール(20%)粒剤	播種時覆土前 50g/箱	2	0
クロチアニジン(0.8%)・ イソチアニル(2%)粒剤			69.2

表4 現地圃場試験結果 (2011年 大仙市太田町)

供試薬剤	処理時期 処理量	平均すくいとり虫数(20回振り)	
		7月8日	8月4日
クロラントラニプロール(0.75%)・ プロベナゾール(24%)粒剤		2.0	0
イミダクロプリド(2%)・ スピノサド(1%)・ イソチアニル(2%)粒剤	緑化期 50g/箱	7.7	41.0
フィプロニル(0.6%)・ オリサスロトビン(2%)・ プロベナゾール(20%)粒剤		26.3	236.0

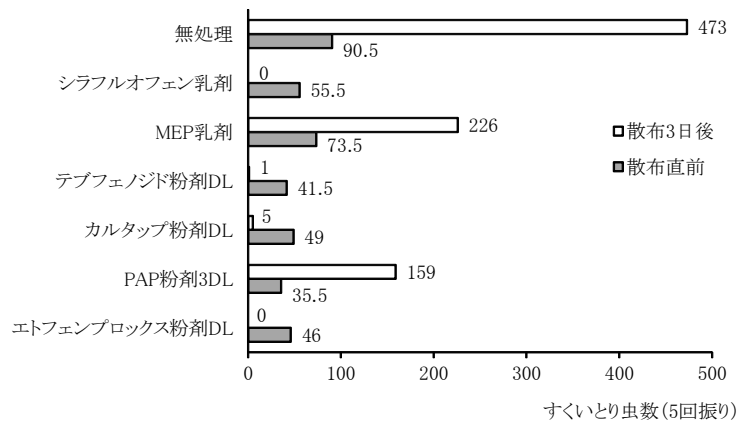


図1 茎葉散布剤の現地試験結果(2011年 大仙市太田町)